Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-04

大津留厚・奥村弘・長野順子著『捕虜として姫路・青野原を生きる 1914-1919 箱庭の国際社会』（時評・書評・展示評）

黒河，潤二

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,4:122-129

(Issue Date)
2012-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81004261

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004261

Current Topics & Reviews

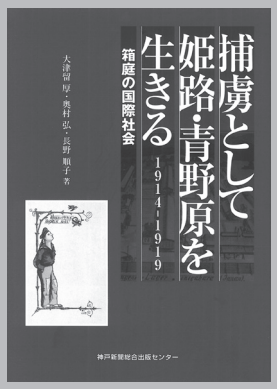
時評・書評・展示評

大津留厚・奥村弘・長野順子著『捕虜として姫路・青野原を生きる　1914-1919　箱庭の国際社会』

黒河　潤二

一　はじめに

本書は神戸新聞と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの共同企画として、第一次世界大戦時の青野原俘虜収容所を中心に地元の歴史を掘り起こし、再構成していく過程の中間報告をまとめたものとして発刊された。本書のおもな研究対象となっている青野原は、現在の兵庫県小野市と加西市にまたがる地域で、第一次世界大戦に際して日本の捕虜となったドイツ兵とオーストリア＝ハンガリー兵の捕虜収容所がおかれていた。小野市と地域連携協定を結ぶ神戸大学は、青野原俘虜収容所の実態究明に協力するばかりでなく、地域住民との共同作業によって二〇〇五年に小野市立好古館で開催された展示会を皮切りに、神戸大学交響楽団による収容所演奏会の再現演奏会を小野市、そして神戸大学で開催するなど、地域や大学に目に見える形でも、その研究成果をアピールし続けてきた。これらの成果は、いったん二〇〇七年に『青野原俘虜収容所の世界　第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』（大津留厚・藤原龍雄・福島幸宏著、山川出版社）としてまとめられたが、これ以降、地域の「歴史興し」の事業は世界的な広がりをみせ、二〇〇八年には捕虜兵の祖国オーストリアでの展示会と再現演奏会の開催が実現した。本書では、これらの事業がどのような意義をもち、いかにして実現へとこぎつけることができたのかについても、克明に述べられてい



大津留厚・奥村弘・長野順子著『捕虜として姫路・青野原を生きる　1914-1919　箱庭の国際社会』

神戸新聞総合出版センター
2011年10月発行
A5判　102頁
税込840円

る。

評者は現在、中学生と高校生に社会科・地歴公民科を教える仕事についているが、高等学校の学習指導要領で世界史が必修となって以来、年々生徒の世界史離れが進んでいるように感じている。その理由のひとつは、現在の中学校社会科の歴史的分野の中では、世界史の内容を系統的には教えられず、高校になっていきなり難度の高い世界史を通史的に学ばされる点にあるように思う。したがって生徒たちの中には、基本的な世界史の流れを理解する以前に、「カタカナの人名が覚えられない」「中国史の難しい漢字がわからない」という、世界史に対する興味・関心とは無関係の理由で、世界史の学びを放棄する者が増えている。こうした世界史教育の停滞した状況を打開するためには、生徒の身近な地域から歴史を掘り起こして生徒と世界との距離を縮めた上で、生徒が少しでも興味・関心をもてる教材を開発し、これを通史学習へとつなげる授業展開を創造していく必要がある。このような教育現場の問題意識からも、本書を読み解いてみたい。

二　本書の構成と地域展方式

本書の構成は以下のようになっている。

はじめに
I　姫路・青野原捕虜収容所の世界
1　皇妃エリーザベト号と日本・オーストリア＝ハンガリー関係
2　姫路の収容所――箱庭の国際社会
3　写真から見る青野原俘虜収容所
4　神戸と第一次世界大戦捕虜兵――もう一つの物語
5　時空をわたる楽の音
――俘虜収容所での音楽会と再現演奏の試み
II　地域社会と世界の往還
――「青野原俘虜収容所」をめぐる神戸大学と小野市の連携の持つ意味――
1　神戸大学における地域連携の特質について
2　小野市との地域歴史文化についての取り組み
謝辞

著者の中で奥村弘氏が担当したII部では、神戸大学が組織的かつ継続的に取り組んでいる地域連携事業の特質をまとめ

た上で、人文学研究科地域連携センターと小野市との取り組みの中にみられる地域歴史文化を活性化させる手法として、「地域展方式」と、青野原俘虜収容所の里帰り展覧会や収容所での音楽会の再現プログラムに代表される「地域と世界の往還」という二つの手法の有効性が実例をもって示されている。このうち「地域展方式」とは、大人と子どもがともに地域の歴史遺産を学び、それを小野市の好古館の一室に展示して図録を作成するという方法のことで、この方式がとられるようになって以来、小野市立好古館の入場者は急増し、地域ぐるみで地域文化を掘り起こす作業が進められるようになってきた。こうした方式は、単に調査・発表の場として博物館の利用をうながすばかりでなく、地域文化を多くの人の手によって共同で掘り起こしていくための新しい手法としても注目される。また、本書の実践例に紹介されているように、この方式に小中学校の教員が関わることによって、地域展が教員の研修の場となると同時に、児童・生徒を受け身にさせがちな社会科の授業改善の場として活用されることも期待できる。小中学校の社会科の学習指導要領に示されている「博物館活用」のひとつのモデルケースとして、「地域展方式」の今後の展開に注目したい。

このようにⅡ部は、神戸大学（なかでも人文学研究科地域連携センター）の地域連携事業の取り組みに対する総括と意義付けをまとめたものであるが、紙幅の関係もあり、以下では主にⅠ部、なかでも大津留厚氏が担当した一章から四章を中心に内容を追い、論評を加えていきたい。なお、これらの章は、先に述べた『青野原俘虜収容所の世界　第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵』の内容に、新たに発見された写真や資料をもとに明らかになった研究成果を加えて書き下ろされたものである。本書の読者には、あわせて読まれることをお薦めしたい。

三　「箱庭の国際社会」

青野原俘虜収容所の特徴は、日本で収容されたオーストリア＝ハンガリー捕虜兵の八割にあたる二三〇名あまりが収容されていた点にある。なぜ青野原にオーストリア＝ハンガリー捕虜兵が収容されることになったのか。本書の一章では、一九一三年の秋から東アジア海域で常駐艦の任務に就いていたオーストリア海軍の巡洋艦皇妃エリーザベト号の動きを通して、第一次世界大戦開戦前後の日本とオーストリア＝ハン

ガリーとの関係の推移が述べられている。

一九一四年前半、日本と中国各地を転々としていた皇妃エリーザベト号は、サラエヴォ事件をきっかけに大戦開始の予想が高まるなか、七月二二日には同盟国ドイツの租借地青島に入港した。第一次世界大戦が始まると、日本は日英同盟を根拠にドイツに宣戦を布告した。しかしオーストリア＝ハンガリーと日本の間に直接の係争問題は存在せず、両国の外交当局も、お互い交戦状態に入ることを望んでいなかった。両国はいったんは皇妃エリーザベト号の武装解除で合意したが、ウィーンから届いた指令でエリーザベト号の乗組員には「青島でドイツ軍とともに戦うこと」が求められた。日本軍の青島攻撃部隊の総数は五万一七〇〇人、これに同盟国であるイギリス陸軍一三九〇人が参加したのに対し、ドイツ側の総兵力は五〇〇〇人にすぎず、戦う前から勝敗は明らかであった。一九一四年一〇月三一日に始まった青島をめぐる攻防は、一週間あまりでドイツ側が降伏し、四六八九人のドイツ、オーストリア＝ハンガリー兵が捕虜となった。

続く二章では、藤原龍雄氏の先行研究に依拠しつつ、京都府立総合資料館歴史資料課の福島幸宏氏の成果も参考としながら、姫路の収容所で形成された「箱庭の国際社会」のありようが描き出されている。

ドイツ、オーストリア＝ハンガリー捕虜兵たちは、一一月一四日に青島を出発して日本に移送された。このうち姫路に収容された捕虜は三二三名で、彼らは収容所の本部が置かれた船場本徳寺をはじめ、三つの寺に分けて収容された。これら姫路の収容所には、ドイツとオーストリア＝ハンガリーの二国関係と、オーストリア＝ハンガリーの多言語的な世界が反映されていた。ここにみられた姫路の収容所独特の風貌を大津留氏は「箱庭の国際社会」と名づけている。この意思の疎通が思うに任せない社会の中では、食事の多寡など他愛もないことが、ドイツ、オーストリア＝ハンガリー捕虜兵双方の不満の対象となっていた。しかし両国と同盟関係にありながら中立を守っていたイタリアが協商国側で参戦すると、これら捕虜兵の攻撃の矛先はオーストリア＝ハンガリーのイタリア系の兵士に向けられ、一九一五年六月には八名のイタリア系兵士が「半殺し」になるまでの暴行を受けている。このように収容所の中の人間関係は、「箱庭の国際社会」という表現通り、現実の国際関係を如実に反映していたのである。

戦争の長期化とともに、一九一五年には恒久的な収容施設が日本各地に建設されるようになった。その一つが青野原俘

虜収容所である。三章では、残された手記と写真を手がかりに、青野原での捕虜たちの生活が再現されている。

一九一五年九月二〇日、姫路に収容されていた三二三名の捕虜兵は、青野原俘虜収容所へと移動した。この収容所の方針は、大戦の終了まで捕虜たちを平穏無事に預かることであったため、捕虜たちが収容所の生活に不満をもって脱走や反抗行為に及ばぬよう、収容所の生活では娯楽が重視されていた。室内で行う娯楽としては、将棋（チェスだと思われる）、カルタ（トランプ）、ビリヤードが好まれ、音楽や演劇も奨励された。特に音楽に関しては楽隊が編成され、演奏のために小さな音楽堂も建設されてピアノ、オルガン、バイオリンなども備え付けられた。こうした中で「青野原収容所楽団」が結成され、一九一九年三月には、東シベリアで苦境に立たされていたオーストリア＝ハンガリーの捕虜兵のために《慈善演奏会》が開かれることになった。この演奏会の内容が解明され、《慈善演奏会》の再現演奏が実現するまでの経緯については、五章で長野氏が詳しく述べている。また一九一八年には、捕虜たちが作成した作品を展示・販売する捕虜制作品展覧会が開催されたことを示す写真も残されている。この展覧会は、捕虜にとっては収入を得る機会であったが、同時に日本側にとっても、ドイツやオーストリアの優れた技術に接することができるというメリットがあった。一方、屋外の娯楽としては、サッカー、テニス、ボクシング、体操などのスポーツが盛んで、特にサッカーは近隣住民との試合も行われていた。これら以外にも屋外の娯楽で捕虜兵たちが楽しみにしていたのは遠足で、通常は毎週半日、一ヶ月に一回は一日の遠足が行われていた。また一九一八年に第一次世界大戦の休戦協定が結ばれた後、ドイツやオーストリア＝ハンガリーの捕虜兵たちが講和条約の締結まで帰国を待たされる間に、神戸のドイツ人家庭への訪問も実現することになった。他にも三章では、一九一八年になると捕虜たちに収容所の外八〇〇メートルほど離れたところで豚を飼育することが許可されたことや、収容所のバラックの屋根に布団を干している様子のほか、食生活の改善とともに「バンザイ」とよばれる酒盛りが開かれるようになったことなど、収容所の日常生活が写真をもとに再現されている。

第一次世界大戦末期の一九一八年七月、青野原俘虜収容所でドイツの捕虜兵とオーストリア＝ハンガリーの捕虜兵とが格闘し、オーストリア＝ハンガリーの捕虜兵が負傷するという「騒擾事件」が起こった。実はこの事件の背景には、当時

のオーストリア＝ハンガリー全土で発生したロシアからの帰還兵の反乱があったと、大津留氏は両事件の結びつきを強調している。最後の四章では、シベリアから帰還する途上で神戸に入ったチェコスロヴァキア軍団の足跡を追うことで、神戸と旧オーストリア＝ハンガリー捕虜兵とのもう一つの出会いを描き出している。

第一次世界大戦で大量の捕虜を抱え込んだロシアでは、一九一七年三月に革命が起こり、臨時政府が成立した。このときオーストリア＝ハンガリー捕虜兵の中のチェコ系、スロヴァキア系の人々を募ってチェコスロヴァキア軍団が形成されたが、一〇月革命で政権を握ったボリシェヴィキがドイツ、オーストリア＝ハンガリーと講和を目指して交渉を開始すると、チェコスロヴァキア軍団は在ロシアの連合国側の軍事力として、その価値を高めることになった。チェコスロヴァキア軍団は、軍事力としてドイツ・フランス戦線での任務をはたすため、シベリアを通過して極東の港湾から海路ヨーロッパに向かおうと、東に向かっての旅をはじめたが、途中で偶発事件をきっかけにボリシェヴィキ軍と衝突した。このチェコスロヴァキア軍団を救出する名目で、アメリカ合衆国や日本のシベリア派兵（いわゆるシベリア出兵）が行われた。しかしヨーロッパにチェコスロヴァキアが成立すると、シベリアにチェコスロヴァキア軍団が存在する意味はなくなり、本国への帰国が急がれることになった。軍団兵士を乗せた第二船までは、シベリアからアメリカ合衆国経由で帰国したが、インド洋周りで帰国することになった第三船は、関門海峡通過中に座礁し、神戸の川崎造船所のドックで修理されることになった。こうして船の修理まで神戸に滞在したチェコスロヴァキア軍団の兵士をお世話したのが、関西学院のグリークラブのメンバーであった塩路義孝氏であった。この人物を介してチェコスロヴァキア軍団と関西学院のグリークラブとの交流が始まり、一九一九年九月一五日には関西学院でチェコスロヴァキア軍団合唱団の音楽会が開かれた。

チェコスロヴァキア軍団が神戸を後にしたのは同年一〇月三〇日、それからほぼ二ヶ月後の一二月二七日に青野原に最後まで留め置かれていたドイツ、オーストリア＝ハンガリー捕虜兵二二二名が神戸港から帰国の途に着き、青野原俘虜収容所も閉鎖となった。

四　地域と世界史教育をつなぐもの

本書のもつ大きな意義として、まず新たに発見された写真をもとに青野原俘虜収容所の生活を再現したことがあげられよう。本書の三章に掲載されている写真は、ドイツ在住のディーター・リンケ氏より提供されたものであるが、もともとはドイツ捕虜兵ハインリヒ・ハルクシュタイン（青島総督府通信士）の遺族が所蔵していた写真であった。これらの写真に写し出された場所を、地元の人たちの協力をえながら特定し、ドイツ捕虜兵ケルステルンが残した手記などをもとに収容所の生活を再現していく過程は、歴史学の醍醐味を味わわせてくれる。また、これらの写真には、収容所での生活を少しでも快適に送ろうとする捕虜兵たちの姿が、実に生き生きと写し出されている。これほどまでに捕虜の人権が手厚く守られていた背景には、第一次世界大戦が日本にとって総力戦には至らず、あくまで限定的な戦争のまま終結したことがあるのだろう。戦争のありようと捕虜の人権はいかに関わりをもつのだろうか。さらなる検証が待たれる。

また大津留氏は、姫路や青野原の収容所の中の人間関係を「箱庭の国際社会」と呼び、これら収容所の中で起こったいくつかの事件を、世界史の文脈の中でとらえようとしている。こうした地域のとらえ方は、地域史と世界史をつなげるばかりでなく、地域と世界史教育をつなぐ視点としても、大きな意味をもつように思う。実際、本書の一章から四章の内容を教材化することによって、高等学校世界史で扱う第一次世界大戦からロシア革命までの内容を、通史的に教授することは十分に可能であろう。特に第一次世界大戦中にみられた国際関係の推移は、「箱庭の国際社会」の中で起こった事件に如実に反映されているだけに、これら収容所の歴史を三章で使われた写真や資料とともに教材化することにより、生徒たちに「遠く離れた」世界史の教科書の内容を、より身近な事例を通して演繹的に学びとらせる授業をつくり出すことができるだろう。

神戸大学と、評者の勤務する中学校・高等学校の位置する神戸は、一八六八年の開港以来、世界史との関わりの中で成長してきた海港都市で、中国、イスラーム、ヨーロッパ、それぞれの歴史との関わりを示す史跡や建造物を、いまでも街なかで多く目にすることができる。神戸の地域文化を「箱庭の国際社会」という視点から、それぞれの時代の文脈に位置づけていく作業を進めると同時に、単なる投げ込み教材ではなく、中学校や高等学校の社会科・地歴科、とりわけ世界史の通史学習で活用できる教材を組織的に開発することができ

れば、世界史教育の改善に大いに資することになる。さらに、これらの教材づくりを大学が中学校や高等学校の教員と共同で進めることができれば、大学は新たな地域文化の担い手を育てることができるのではないだろうか。このように本書には、中高の社会科・地歴科の現場の閉塞感を打ち破るさまざまなヒントが隠されている。